

■受領No.1418

工業高専での哲学対話によるシチズンシップ教育を 目的とした学生ファシリテーターの養成

代表研究者

小川 泰治

宇部工業高等専門学校 一般科 准教授



Development of student facilitators for citizenship education through philosophical dialogue at KOSEN

Principal Researcher

Taiji Ogawa,

Department of General Education, National Institute of Technology, Ube College Associate professor

本研究の目的は高専における技術者倫理教育とシチズンシップ教育の接続を企図した「哲学対話」の実践を通して明らかになった課題に応えることである。そこで、第一に、高専学生へのファシリテーションスキル養成のための少人数授業の実践を行い、学生たちがファシリテーションに不可欠な哲学対話へのメタ的な視点を獲得しつつあることを確認した。第二に、金魚鉢対話と呼ばれる手法をくり返し行うなかで、大人数の授業での哲学対話の方法論を検討し、ワークシートの開発を行った。

We have been practicing "philosophical dialogue" in order to connect engineering ethics education and citizenship education at KOSEN. The purpose of this study is to respond to the issues that have been uncovered. First, I have conducted small-group classes to cultivate facilitation skills among students, and as a result, confirmed that they are acquiring a meta-viewpoint of philosophical dialogue, which is essential for facilitation. Second, through repeating a method called "fishbowl," we examined the methodology of philosophical dialogue in a large class and developed a worksheet for it.

1. 研究内容

1.1 本研究の背景と目的

現代、高度化する科学技術の発展は従来の想定を超えるような諸問題を生み出し、民主主義社会に価値観や意見の深刻な対立を引き起こしてきた。これを受け、「科学技術コミュニケーション」の必要性が高まっていることは周知の事実である。特に、技術者には市民を単なる啓蒙の対象とするのではなく、自らの専門を広く公共の対話の場にひらくような深い市民的感覚＝シチズンシップを有するものへの自らの変革が求められている。しかし、工学系大学や高専などの技術者倫理教育にお

いては、従来、「専門職倫理」に重きが置かれてきており、シチズンシップ教育の観点の重要性が指摘されるようになったのはごく最近のことであり、十分な実践にもとづく方法論の構築には至っていない。

筆者はこういった課題に対して、これまで「子どもの哲学」ないし「哲学対話」と呼ばれる手法を用いることで、高専における技術者倫理教育とシチズンシップ教育との接続を試み実践を重ねてきた。その結果、筆者の実践には成果とともに「対話に対する当事者性や参加意識の向上」や「集団的思考に対する多様性の確保」といった課題があ

ることが徐々にわかってきた。

以上のような背景のもとづき、本研究では、「工業高専での哲学対話によるシチズンシップ教育を目的とした学生ファシリテーターの養成」を主題と定めている。高専において哲学対話に親しみ、すでにシチズンシップの素養を身につけつつある学生(=「コア学生」)たちの存在に着目し、グループでの対話のファシリテーションを行うことのできる学生のスキル育成およびグループで行う対話型授業の開発を目的とした。

2. 研究の内容

2.1 高専学生へのファシリテーションスキル養成の実践

2020年度に当初の計画のもとづき、筆者の勤務校のカリキュラムに配置されている選択科目「プロジェクト学習」において、哲学対話のファシリテーションスキルに特化したテーマの授業を開講した。履修者は高専本科の2,3年生(高等学校の同学年と同じ世代に当たる)、11名である。当初は対面での実施を予定していたが、新型コロナウイルス感染症対策の観点から、全面的にオンライン上での実施となったものの、週に2回、計10日程度をかけて、オンライン哲学対話、読書会、企画会議、学外の哲学カフェへの参加とレポートなどに取り組んだ。最終的なゴールに据えていた学生自身が企画・運営する外部参加者向けのオンライン哲学カフェについては、午前・午後と対象を変えて2回実施をし、学生自身が進行役を務めたほか、ルール説明やテーマの設定、タイムキーピングなどもチームで行い、大きな問題なく対話の場を運営することができた。(詳細は[小川,2021b]を参照のこと。)

学生に実施した授業実施前後のアンケートや授業最終回に行った「この授業でなにを学んだか」についての対話の分析を通して明らかになったことがある。それは、学生たちは哲学対話の運営やファシリテーションという視点から授業に取り組

んだことで、以前の単なる哲学対話好きの参加者であったときとは異なる視点(メタ視点)から哲学対話について捉えなおすことができるようになっていて、ということである。こういったメタ的な視点の獲得は、必修授業におけるグループ哲学対話においても、哲学対話に慣れていない周囲の生徒に対する問いかけや発言しやすい雰囲気づくりのための配慮といった対話をよりインクルーシブにするような貢献を期待できるように思われる。

2.2 グループ対話を取り入れた授業の開発

新型コロナウイルス感染症拡大の影響でオンライン授業が長く続き、対面での哲学対話の実施が長らくできなかったため、当初の計画のような東京高専と連携をしたグループ対話型授業の展開やワークシートの開発については十分に行うことができなかった。

その代替として、対面授業再開以降、参加人数の多い教室で哲学対話を行うための方法としてしばしば紹介されてきた(ものの、その効果や課題の検証自体は十分に行われてこなかった)金魚鉢対話(=フィッシュボウル)をくり返し、行いその利点や課題を検討した。金魚鉢対話とは、クラスを半分に分け、1つのグループが前半に対話をし、もう一つのグループはその間、円の外で対話の様子を観察しワークシートにメモをする、そして授業の後半に役割を入れ替えるという方法である。この方法をとることで、たとえば40名のクラスで教員1名が対話の進行をする際にも一度の対話の人数を20名と、適正人数に近づけることができる。

この手法を継続的に哲学対話のなかで行い学生らの感想やワークシートから確認できたことは、対話に加わることでなく、発言のためのプレッシャーがない状況で観察(聞くこと)に集中することで、学生たちの思考が前進するという面があることである。他方で、思考の外化や対話の内容の記録に不慣れた学生たちにとってはワークシ

ートの改良という課題があること、また20名という対話の人数においても「対話中にうまく発言できないこと」「話したかったけど話せなかったこと」についてのある種の不良感があることが明らかになった。そのため、現在は引き続き、観察用のワークシートについて思考の外化を促すための工夫や、金魚鉢対話とグループ対話を組み合わせた授業を実施し、検証を続けている。

3 今後に向けて

本研究の実践を通して、一定の成果とともに2つの課題が明らかとなった。

第一点目は、「哲学対話」という実践自体の多様性や相違点から生まれる技術者教育にあたえるインパクトや方法論の違いについての考察である。これまでの筆者の「哲学対話」の実践が「子どもの哲学」という実践・研究に大きくルーツをもっているが、国内で哲学対話の実践を行っている事例のなかには現象学にルーツをもつ方法論も存在する。両者にはシチズンシップ教育としての哲学対話という本研究の大きなテーマにとっても無視しがたい強調点や方法論の違いがあるため、その比較検討に着手したところである。(詳細は〔岩内・小川, 2022〕を参照のこと)

第二点目は、副産物的に技術者教育の現場に限らず学校における哲学対話の実践上の課題が明らかになってきたことである。すなわち、高専に限らず対話型の授業を行う際には一定程度共通する倫理的な課題がありそれに対して教員個人ではなく組織的に対応する必要がある。(詳細は〔小川, 2021a〕を参照のこと) 今後は、本研究は技術者教育現場でのグループ対話型授業の汎用性を企図したものであった。今後、研究を継続していくにあたっては、上記のような実践者に向けた倫理的課題への対応例や方策の検討も行っていくこととしたい。

* 本研究は、村瀬智之氏(東京工業高等専門学校

一般教育科) および西山溪氏(同志社大学政策学部政策学科) を研究分担者として迎えた共同研究である。

2. 発表(研究成果の発表)

- 1) 小川泰治「学校における哲学プラクティスの課題と実践者の職業倫理——これから、実践者に必要なのは誰との／どのような協力・協業体制だろうか?——」日本哲学プラクティス学会第3回大会 シンポジウム「哲学プラクティスの倫理」、オンライン、2021a。
- 2) 小川泰治「オンライン哲学カフェ開催に向けたPBL型授業の実践報告 —教室の物理的制約をめぐるジレンマを解消するために」日本哲学プラクティス学会編『思考と対話』第3号、35-40、2021b。
- 3) 岩内章太郎、小川泰治「哲学対話に「答え」はないのか —子どもの哲学と現象学的哲学対話の観点から」早稲田大学現代死生学研究所『現代生命哲学研究』11号、57-81、2022。